

比較する服装によって影響される服装評価

○福井典代・中川敦子* 藤原康晴*

(・鳴門教育大, *香川短大)

【目的】私たちは、自己の性格、能力、外観を自ら評価している。その評価に際して、客観的な基準がないため、他者のそれらと比較して相対的に行っている。この事象は、フェスティンガーによって提唱された社会的比較としてよく知られている概念の一つである。この研究では、ある特定の服装の評価がその周囲に存在する服装(比較水準)の違いによってどのような影響を受けるかについて検討しており、本報では、各評価項目別、実験条件別に各服装について評定平均値の差の検定を行い、比較水準の違いによる影響を検証した。

【方法】「レストランで開かれる親しい友人の誕生会」に出席することを想定して、「派手～地味」、「個性的～平凡」、「ドレスィ～カジュアル」および「軽快～重々しい」の評価項目別に50種の服装の中からサーストン法に準拠して15種ずつの服装を選定した。各評価項目に対して15種の服装をその評定の程度に応じて5カテゴリーに分け、5カテゴリー中の2カテゴリーを除外した比較水準の異なる条件下で服装評定を行い、5カテゴリーに帰属するすべての服装の存在下での評定結果と比較した。

【結果】「派手～地味」および「ドレスィ～カジュアル」の評定については、各評価項目別に基準となる5つのカテゴリー中、比較水準として存在しない2つのカテゴリーの方向に評定値が移動し、比較水準の影響を検証することができた。「個性的～平凡」の場合、基準とすべき15種の服装の評定において「個性的」と「やや個性的」などの分割が不明瞭となり、5つのカテゴリーを明確に設定することができなかったが、各実験条件で削除されているカテゴリーの方向へ評定の移動が認められた。「軽快～重々しい」の評定は、特に個人差が大きく、本実験では比較水準の影響を明らかにすることはできなかった。